

[書評]

三代川寛子編著

『東方キリスト教諸教会：研究案内と基礎データ』*

高橋 沙奈美

宗教の違いによってボーダーを引くことはほとんど不可能であるが、有史以来、人間は宗教の支配領域にもボーダーを引こうと試み続けてきた。その結果、あるものは消滅し、あるものは「異端」とされ、またあるものは混淆するなど、様々な変化を遂げた。ここで紹介する編著は、イスラームとキリスト教のコンタクトゾーンである地中海沿岸地域を中心に、東方教会の伝統を持った宗教が辿った歴史とその現状を紹介するものである。

本著が主に扱うのは、431年のエフェソス公会議で異端認定された「ネストリオス派」(アッシリア東方教会)と、451年のカルケドン公会議で起草された信仰の宣言文「カルケドン定式(キリストが神性と人間性の両性をもった唯一のペルソナ(位格)、御父と同一実体の神、我々と同一実体の人間であり、これらが混合されず、変化を受けず、分割されず、分離されず結合している⁽¹⁾)」を受け入れなかった非カルケドン派の東方正教会(Oriental Orthodox Church)である。カルケドン派の東方正教会(Eastern Orthodox Church)、すなわちコンスタンティノープル世界総主教を筆頭とする正教会も、日本語では「東方正教会」と訳されることがあるためにやや紛らわしいが、両者は教義の点からだけでなく、教会慣例や、教会組織の在り方、教会の政治的・社会的影響力などの点で大きく異なる。誤解を恐れずに言えば、本著で紹介されているのは、「忘却された」、「敗者の」、「抑圧された」、「少数派の」キリスト教諸教会なのである。

近代以前の教会分裂に関しては、神学的な問題が根底にあるような錯覚に捉われがちである。しかし、言語集団、同族集団などのアイデンティティと強力に結びつく、極めて政治的なキリスト教会の性質は近代国民国家以前においても重要な意味を持っていた。本著はこのことを多岐に渡る事例を基に論じるものである。東方諸教会が誕生する原因となった5世紀の公会議(エフェソス公会議とカルケドン公会議)も、そこで主に争われたのはキリスト論であったばかりでなく、教会の権威をめぐる政治的問題であった。彼らはキリスト教の主流派から「異端」として斥けられ、時代が下るとその多くがイスラーム王朝やオス

* 三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会：研究案内と基礎データ』明石書店、2017年。

(1) 「カルケドン定式」E. A. リヴィングストン編(木寺廉太訳)『オックスフォードキリスト教辞典』教文館、2017年、201頁。

DOI : 10.14943/jbr.9.129

マン帝国の支配下で少数派の異教徒として生活することを余儀なくされた。

本書は上智大学を拠点とした「イスラームをめぐる諸宗教間の関係の歴史と現状」研究会(2011～2012年)の成果報告の増補版である。このプロジェクトの性格を反映して、本書では東方諸教会のイスラーム世界との接触が中心的主題のひとつとなっている。すなわち、中世の十字軍や交易から、近代以降の東方諸教会と帝国主義やオリエンタリズムの関係、そして昨今の中東における地域紛争とディアスポラの問題といった大変興味深い問題を多く含む。本書は、西はマグレブから東はインド・ケーララ州、北はアルメニアから南はエチオピアに挟まれた領域を主要な考察対象としている。本書では、東方諸教会を宗派ではなく、地域に分けて整理して紹介するという手法が取られている。本書で取り上げられている地域と宗派は以下のとおりである。

第I部 ナイル川流域

1. コプト正教会(三代川寛子、戸田聡、小林稔、貝原哲生、辻明日佳、松田俊道、岩崎真紀)
2. コプト・カトリック教会(三代川寛子)
3. エチオピア正教会(石川博樹、石原美奈子、三宅理一)

第II部 レヴァント

4. シリア正教会(高橋英海、武藤慎一、太田敬子、佐藤紀子、飯野りさ)
5. シリア・カトリック教会(高橋英海)
6. マロン・カトリック教会(三尾真琴、高橋英海)
7. ギリシア正教会(菅瀬晶子)
8. メルキト・カトリック教会(菅瀬晶子)
9. ラテン・カトリック教会(中村妙子)

第III部 メソポタミア

10. アッシリア東方教会(高橋英海)
11. カルデア・カトリック教会(高橋英海)

第IV部 アルメニア

12. アルメニア教会(吉村貴之、浜田華練、藤田康仁)

第V部 アナトリア

13. ビザンツ教会(井上孝一、草生久嗣)
14. アルメニア教会(上野雅由樹)

第VI部 インド

15. 聖トマス・キリスト教徒(高橋英海、アガスティン・サリ)
16. インドの非カルケドン派教会(ヴェリヤト・シジル)
17. インドのシリア・カトリック教会(アガスティン・サリ)

18. インドにおける独立シリア教会／改革シリア教会(アガスティン・サリ)

19. インドにおけるアッシリア東方教会(アガスティン・サリ)

第Ⅶ部 マグリブ・イベリア半島

20. 西地中海のキリスト教とイスラーム(豊田浩志、角田紘美、黒田祐我、関哲行)

ちなみに、東方諸教会に関する類書として、アズィズ・S・アティーヤ著(村山盛忠訳)『東方キリスト教の歴史』(教文館、2014年)がある。ここでは、コプト教会、ヤコブ派教会、ネストリオス派教会、アルメニア教会、聖トマス・キリスト教会、マロン派教会、その他現存しない教会の歴史が宗派ごとに叙述されている。ひとりの碩学が著した歴史書として、いわば「正統派」の教会史を記しているのがアティーヤの著作であるといえよう。それに対して、本著はむしろ地域に着眼している。「はじめに」で、編者の三代川寛子が総括しているように、本著は「東方キリスト教諸教会の歴史を[……]、東西地中海域における西方キリスト教世界、イスラーム世界、そして東方キリスト教世界という三者の接触・交流の中に位置づける」(7頁)ことを目指している。本著が教会史家や宗教学者のみならず、歴史、宗教、建築、言語、文献学などさまざまなディシプリンを持つ地域研究者によって書かれていることも本著の特徴である。それによって、本著はキリスト教研究の枠を乗り越え、キリスト教徒という少数派から見た地域研究としての性格を強く感じさせるものとなっている。ただし、地域で分類したために、イスラーム以前のビザンツ帝国の広範な版図に拡大した教会の力、現在に至るまで地域を跨いで存在するアッシリア東方教会やアルメニア教会の影響力などはやや読みにくいものとなっている感は否めない。しかし、アティーヤの著作がキリスト教教会研究であるのと対照的に、本著はキリスト教境界研究として読まれるべきものである。つまり、宗教、民族、言語が入り乱れる地域を舞台として、東方諸教会が、多様性の境界を超えて、その活動領域を見出し、確保し、拡散(あるいは縮小)していく様が本著の主眼である。

以下、本著の内容をもう少し詳しく見てみよう。以下では、領域をつなぐ／跨ぐ教会の役割に関わるいくつかの論点に絞ってみたい。以下では、領域をつなぐ／跨ぐ教会の役割に関わるいくつかの論点に絞ってみたい。以下では、領域をつなぐ／跨ぐ教会の役割に関わるいくつかの論点に絞ってみたい。以下では、領域をつなぐ／跨ぐ教会の役割に関わるいくつかの論点に絞ってみたい。

1. 東方諸教会のアイデンティティ：異端化と土着化

東方諸教会の複雑さのひとつは、これらの教会が「異端」として、カルケドン派教会の世界といった断絶されてしまったことにある。世界総主教座とビザンツ帝国を論じた草生久嗣は、聖権(教皇権)と俗権(王権)を対立的に捉える西欧の政教分離的な立場から生じた史学上の研究概念を、ビザンツに適應することの限界を指摘している(第13章2節)。草生に従って、複数の宗派・教派を包含する多元性をもっている世界としてビザンツ東地中海世界を捉え、東方諸教会を「異端諸派」である以前に「それぞれの地域においてそれぞれの

個性とともに生活を営むキリスト教コミュニティ」であったことに注意を払うことは重要であるように思われる。

ただし、東方諸教会にあって、特定の民族教会として定着した例は多くない。エチオピア正教会とアルメニア使徒教会は、それぞれの民族における支配的宗派であり続けたといえるが、その支配領域は決して一定ではなく、むしろ時代と共に変遷した。エチオピアでは4世紀にキリスト教が受容されて以来、正教会は支配者の宗教であり続けた。とはいえ、エチオピア正教会の頂点に立つ大主教はコプト教会で叙任されて赴任するという伝統が20世紀まで続いていた(第3章)。さらに16世紀以降には、ムスリム勢力の伸張と改宗の圧力、それを背景としたポルトガルによる支援とカトリックの圧力という危機があった。また、アルメニア教会は、コーカサスやアナトリアがイスラーム化していく過程で、アルメニア人の民族宗教となった。アルメニア使徒教会は領域支配型の教会ではなく、民族と共に領域を移動する教会であった。それは主座主教カトリコス座が幾度となく移動したことに端的に表れている(第12章)。

また、ほとんどの東方諸教会は、ムスリムが多数派を占める地域に暮らす人びとにキリスト教徒としてのアイデンティティを付与することで、言語集団と並ぶサブカテゴリーを形成している。エジプトのコプト教会、レバノンのマロン・カトリック教会などがそうした教会の筆頭として挙げられるだろう。現在のエジプトにおけるキリスト教徒の割合は最大で1割とされており、アレクサンドリア総主教座を主座とするコプト正教は、その中の最大宗派である。「コプト」とはそもそもエジプトを意味するギリシア語に由来するといわれ、近代以降のコプト正教徒は、アラブ・ナショナリズムや汎イスラーム主義ではなく、エジプトという祖国に対する忠誠心や帰属意識を強調する領域型国民国家形成を訴えるエジプト・ナショナリズムを主張してきた(第1章7節)。また、ムスリムとの対立ではなく共存を可能にする、宗教実践としての聖人崇敬の展開が興味深い(第1章8節)。マロン派は十字軍との接触を機に1182年にカトリック教会と合同し、その後の対抗宗教改革の流れで、カトリック教会との交流は一層進んだ。宣教師たちがオスマン帝国第三の都市アレppoを訪れて、マロン教会の発展に寄与しただけでなく、マロン派の学校で学んだ者たちもヨーロッパでのアラブ語・シリア語研究を促した。さらにオスマン帝国の解体後、レバノンがフランスの委任統治領となったことが、この地におけるマロン派の政治的優位につながった。レバノンでは大統領および国軍司令官はマロン派から選出されており、現在その人口に占める比率は減少しつつあるものの、歴史的に重要な教会であることに変わりはない(第6章)。

東方諸教会のいくつかにおいては、典礼をシリア語で行うことが特徴となっているものがある。西シリア語を用いるシリア正教会、シリア・カトリック教会、マロン教会、東シリア語を用いるアッシリア東方教会、カルデア教会では、信者共同体が日常的に用いる生

活言語とは別に、典礼語としてのシリア語が象徴的な地位を占めてきた(実際には典礼でシリア語が用いられることが稀な場合もある)。ただし、典礼語としてのシリア語が彼らの重要なアイデンティティであると同様には言い難い。たとえば、現在のシリア正教会では、汎イスラーム主義や汎アラブ主義に対抗する大シリア主義を志向し、典礼言語としてのシリア語を重視する人びと(シリア・アラム派)、古代アッシリア文明にルーツを見出そうとする人びと(アッシリア派)がいる。さらには彼らと同様にシリアに居住する非アラブ民族としてのクルド人との差異化を図るため、アラブのキリスト教徒というアイデンティティを重視する人々もいる。また、シリア語以外での典礼語を重視する例として、東地中海域で誕生したメルキト・カトリック教会がある。ここでは、ギリシア語の神学に通じた高位聖職者とアラブ人聖職者・信徒の乖離の結果、アラビア語を典礼語とするアラブの教会であることが誇りとなっている。

2. イスラーム世界の寛容とカトリックとの出会い

イスラーム法治下にあつて、キリスト教徒およびユダヤ教徒はズィンミーあるいはアフル・アッズィンマ(契約の民)として扱われていたことはよく知られている。これらの名称はイスラーム政権とズィンマ(生命財産の安全保障)の関係を結ぶ者を意味していた。彼らは、イスラーム社会の中で「商人として、官僚として、専門職として、学者として影響力を持ち、活躍する」可能性を持っていたといわれる(第1章6節)。こうしたことは、同時代の西欧のキリスト教徒にとっては驚くべきことであった。14世紀から17世紀にかけてドイツ語圏出身者が記したオスマン帝国旅行記は、ムスリムの支配者が異教徒の信仰に対して単に寛容を示すのみならず、時にキリスト教の信仰を尊重し、キリスト教徒に敬虔であることを求めたことが記されている⁽²⁾。

さらに近代に入ってから事例としては、タンズィマート期のオスマン帝国におけるアルメニア文字の定期刊行物に関する分析が目を引く。これらの編集者たちはアルメニア共同体政治に深くかかわり、オスマン政府に対してアルメニア人の処遇の改善を求める活動にも着手したという(第14章1節)。

また、東方諸教会がカトリックと様々な形で「再会」した事も、東方諸教会の生き残りに大きな影響力を与えた。東方諸教会が根付いたすべての地域に、カトリックの宣教団は姿を現した。カトリック教会は最初、宣教師を送るための足掛かりとして東方諸教会の協力を求め、宣教会が根付くと東方諸教会に対して学校の創設などの支援を行い、最終的には、東方諸教会を合同し、当該地域を支配するための梃とするという流れに従うことが多い。コプト教会の場合は、ヨーロッパとエジプトの交流の歴史は、13世紀のカトリックの

(2) 河野淳「寛容なる異教徒の下で：オスマン旅行記著者たちの観察と決断」甚野尚志、踊共二編著『中近世ヨーロッパの宗教と政治：キリスト教世界の統一性と多元性』ミネルヴァ書房、2014年、377-380頁。

修道会の宣教に遡るとされる。しかし、おそらく現在のコプト・カトリック教会の流れに連なるのは、ナポレオンの遠征に始まる19世紀以降の列強支配を背景としたカトリック教会の進出であろう。カトリック教会は、ポルトガル、オランダの支配が続いたインドにも複雑な教会分裂をもたらした。

3. ディアスポラ教会として

現在、中近東地域から離散したディアスポラ共同体の中には東方諸教会の信者が少なくない。ディアスポラ共同体の一方の極には、経済的利益を求めて、世界各地に移住していった集団がある。20世紀後半以降のエジプトでは、富裕層や知識層が大量に国外移住したが、その中でもコプトの移住率は高いといわれる。1999年のデータによれば、コプト総人口の約二～三割がディアスポラであるという。コプトのディアスポラは経済的理由による移住者が多い。それゆえ、「母国と移住先両方の文化をハイブリッドに継承し、新たな世界を創造」(第1章9節)することが比較的容易といえそうである。

もう一方の極には、紛争や政治的抑圧によって、離散を余儀なくされた集団がある。現在のシリアに居住するシリア正教徒は、20世紀の初頭に汎トルコ主義の高揚を逃れて移住してきた人びとの子孫であるといわれるが、2011年以降のシリア内戦によって、彼らの居住するシリア北部はISによる著しい破壊を受け、再び欧州、北米、オーストラリアへの移住を余儀なくされる人びとが急増した。このように、ディアスポラ教会のグローバルな増加と一口に言っても、それは経済的理由によって移住し、容易な往来が可能な集団と、政治的理由によって離散せざるを得なかった集団、二度と祖国に戻ることがかなわないであろう集団とでは大きく異なる。いずれにしても、中東地域でそもそものマイノリティであった東方諸教会信者たちにとって、ディアスポラとして故郷を離れるという選択肢は今後ともアクチュアルなものであり続けることは間違いない。

拙評では、原著の多岐に渡る内容を紹介しきれなかった。原著は副題にあるように「研究案内と基礎データ」という位置づけをなされている。原著の執筆陣の研究関心を反映したその内容は、独立した研究論文のような節から、簡潔な歴史と現状紹介にとどまる節に至るまで、質的量的に偏りが目立つ。ただし、こうした研究状況の偏りはある意味当然であって、むしろそうした状況にもかかわらず、東方諸教会に関する百科事典的編著を上梓し、今後の研究を促そうという編著者の意図は評価されるべきであろう。原著がこれから研究を始めようという大学院生に対しては非常に優れた指南書であることは間違いない。また、評者のように、これらの教会のあらましについて知っておきたいという関連分野の研究者にとっても、コンパクトな解説を提供してくれる良書といえよう。